<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>後・ポスト・近代における「解放の空手」の基本理念の考察 - 沖縄空手の発展の歴史と未来像 -</td>
</tr>
<tr>
<td>氏名</td>
<td>名嘉憲夫、嘉手苅徹</td>
</tr>
<tr>
<td>取材</td>
<td>史料編集室紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>責任者</td>
<td>沖縄県教育委員会</td>
</tr>
</tbody>
</table>
後（ポスト）近代における「解放の空手」の基本理念の考察
—沖縄空手の発展の歴史と未来像—

名嘉 憲夫・嘉手苅 徹

目 次

Ⅰ はじめに 新しい時代の新しい空手へ向けて

Ⅱ 空手の発展の歴史—前近代の「武術」、近代の「武道」、後近代の「武芸」
1. 前近代社会と「武術」
2. 近代社会の「武道」
3. 後近代社会における「武芸」

Ⅲ 沖縄空手の21世紀的発展—「解放の空手」の基本理念
1. 現代沖縄空手の3つの側面
2. 第1の理念—「空手に愛心攻撃なし」
3. 第2の理念—「空手に解決あり」
4. 第3の理念—「生命の尊重」（生命尊重）
5. 第4の理念—「文礼の発展」（文礼発展）

Ⅳ さいごに 空手の新しい可能性

Ⅰ はじめに 新しい時代の新しい空手へ向けて

今からおよそ100年ほど前、糸満安恵や富名腰（船越）義珍、宮城長順、摩文仁賢和、といった沖縄空手の先人達は、新しい空手の理念や技法の体系、段位制度などを含んだ「近代空手」、すなわち20世紀の空手を創り始めた。とくに糸満は、学校教育の体育に「唐手」を導入する役割を果たしたが、指導者の養成という意味でも空手発展の重要な契機となった。

21世紀に入った現在、新しい21世紀の空手を構想する必要が出てきている。別途でいえば、「空手の近代化の近代化」が必要である。本稿において、「後（ポスト）近代社会」の原理と必要（ニーズ）に対応した空手はどのようなものになるのか、

---

Naka Norio and Kadékaru Toru: Basic Principles of Liberation Karate in the Post-modern Age: the historical development of Okinawa Karate and its future prospects

（1）『沖縄教育』第31号には、沖縄県中学校（現在の首里高校）において、1905年（明治38）、1月、沖縄特有の拳法唐手の稽古を始める末より職員一同教師に就いて研究させが教育上価値あるを認め本年度よりは一般生徒に課すこととせり」と記されている（『沖二県立中学校沿革』、沖縄教育會、1908年、p.33）。富名腰は糸満の弟子であり、この年に宮城は県中学校に入学していた。そこで指導を受けた者達が教員や指導者となって多くの後進を育てていった。
それを沖縄のすべての空手家、そして世界のすべての空手家と共に考えてみたい。

経済の世界化（グローバリゼーション）と情報通信革命（IT革命）が進行する現在は変
革期である。古代から中世へ、中世から近世へ、そして近世から近代への移行期のように、
変革期にはそれまでの古い制度や組織、実践の体系が見直され、新しい意味づけが行われ
て、再生・発展していく。新しい理念が加えられ、新しい技法が編み出され、新しい聴衆
が生まれる。それまで比較的一部の人々のものであった知識や技能が、より一般化・普遍
化され、より多くの人々の間に広がっていく。仏教などの宗教や生け花、茶の湯などの芸
事、学問・教育、スポーツの普及の歴史を見れば、こうした流れがよく分かる。

たとえば、奈良時代の「国家仏教」が平安時代には「貴族仏教」となり、さらに鎌倉時
代の「大衆仏教」として、全国津々浦々まで広がった。近世、近代を通じて様々な社会
状況の変化に応じて、幾つの「新興仏教」が生まれ発展していた。茶の湯なども、最初
はただ僧侶が「健康のために茶を飲む」だけであったのが、「侘び」の理念を中心にし
た千利休などの洗練影拠を経て、武士や町人の間に広がっていた。今日では、多数の家
元流派によって、独自の茶の作法が教えられている。学問も、当初は漢語を読める一部の
支配階層のものだけであったのが、仮名発明などの影響もあって貴族や武士全体に広が
り、さらに、中世・近世を通じて町民や農民の一部まで学ぶことができるようになってい
った。明治期における義務教育制の導入は、ほとんどの国民に「読み書き計算」をできる
ようにさせた。第2次大戦後の学制改革によって、さらに多くの人々がより多様な教育機
会を得ることができるようになった。スポーツに関しても、近代以前には「労働」や「武
芸」、「宴会行事」などのために体を動かすことはあっても、健康と楽しみそのものため
に運動を行うということは、ほとんどなかった。現在一般的に使われる競技的な「スポー
ツ」や「体育」といった概念は、近代社会が生み出し普及させたものである。

このように学問や教育、宗教、芸事、スポーツの発展・普及の歴史には、1つの共通性
がある。それらは時代の変化や必要（ニーズ）に応じて形成され、理念化され、再構成さ
れて発展していったということである。どのような分野においても「伝統」は生みだされて、
加味され、再構成されて発展していく。E. ホブズボウムらの用語にしたがえば、「伝統は
発明される」である。空手や柔道、剣道、合気道などの武道の歴史も、同じような過程

(2) 「スポーツ」は、もともと余暇を楽しむことを意味していたが、時代とともに変遷した。ここ
では、近代の英で生み出されたサッカー、ラグビー、テニス、ボートレースなどの個別的な
種目の総称として捉えている。physical educationの訳語としての「体育」は、「身体教育」を意
味する教育概念として明治期に登場した。

(3) E. ホブズボウム、T. レンジャー編『創られた伝統』前川啓治、幌原景昭共訳、紀伊國屋書店、
1992年。
をたどってきたように見える。井上俊は、日本古来の柔術を講道館柔道として顕華させた嘉納治五郎が、当時柔道の合理性や科学性を説くだけでなく、柔道はあくまでも日本古来の武術の伝統に根ざすものであると主張した意味において、武道は、「新しい時代への適合性（伝統との非連続性）と古い伝統とのつながり（連続性）」という二重の性質を持つことによって発展してきたのであり、これは、柔道に限らず剣道や弓道も含めた武道一般に見られるものであると考察している。「

現代に継承される様々な格闘技は、武道を含めて多様なルールで競技が行われている。鍛え抜かれた肉体と高度な技を駆使した攻防戦を茶の間でも見ることができるようになった。しかし、生死が観かた場面が安易に演出されるようになり、格闘技の本質にある「暴力」の問題は、選手や視聴者にとってもおさざ里になっているのではないかと思われる。

本論考では、まず沖縄空手の発展を概観しながら、「理念型形成的方法」を使って、これまで十分に注意を払われてこなかった側面について考察する。沖縄空手に関する歴史的資料の発見や整理・分析は、これまでのところ十分行われておらず、いまだ「発展途上」にある。沖縄空手に関する歴史的資料の考証、したがってそれに基づいた解釈の提示は、今後とも歴史家によって続けられねばならない。一方、本稿における考察は、沖縄空手の現代的意義を考えるにあたっての重要な事項を論理的に構成した「理念型形成的方法」を取っている。この方法を取ることのメリットは、歴史的資料の存在に制約される「歴史的研究方法」と異なり、社会的事象の様々な側面を論理的に構成して結びつけ、「比較のための純粋型」を提示することにある。一般的にこれらの純粋型は、一面では経験的事実に基づくが、他面では論理的に構成されたものである。ある比較目的のために有効であれば、こうした「理念型」は十分意義のあるものとなる。

次に、現代社会における空手の意義付け、そして21世紀における沖縄空手の1つの発展の可能性を「解放の空手」という形で考察してみたい。

II 空手の発展の歴史—前近代の「武術」、近代の「武道」、後近代の「武芸」

1. 前近代社会と「武術」

空手や柔道、剣道、合気道などの武道の発展の歴史には、ある共通のパターンがみられ

（4）井上俊『武道の誕生』吉川弘文館、2004年、pp.118-121、また「武道は、『近代の発明』であると同時に、エリック・ホブズボムらのいう『伝統の発明』の一形態」とも述べている。
る。いずれも、前近代社会における「武術」として生まれた。前近代社会というのは、いわゆる封建社会といってもいいのであるが、その特徴は、支配階層が刀その他で武装した身分制社会であるということである。この社会は、スペンサーのいう「軍事型社会」で、単に社会組織の基本的原理が「軍事的・強制的」であるということだけでなく、社会の状態が「暴力的」であった。日本の封建社会に関していえば、利害対立があった場合に、武士は、農民その他に対して「斬り捨て御免」が許されただけでなく、お互いの間でも“切り合い”の可能性があった。もちろん、戦乱に明け暮れた16世紀の戦国時代と社会が安定した18世紀の元禄時代では、武器使用の頻度や法的手続きの拘束力、民衆に対する支配層の“応答度”に違いはある。しかし、社会における利害対立が、暴力的衝突に発展する可能性は常にあった。苛酷な年賀の減免が入れられなければ、農民は一揆に訴えざるを得なかった。仇討ちは禁止されていたにもかかわらず、実際にには後々まで行われた。“太平の世”ではあっても、武士はいざという時に備えなければならないかった。

こういう社会は、一種の“可能性としての戦争社会”にあるといえる。この意味は、個人間や集団間の利害対立がある場合、実際の私的な暴力的衝突や殺し合いが起きていなくても、その可能性が常にあるような社会のことをいう。こうした社会では、武士といわず農民といわず、他の人々からの攻擊に対して身を守る必要があった。そこで生まれ発展したのが、「武術」である。「武術」には、武器を持って闘うものと武器を持たないで闘うものがある。前者の例が剣術や槍術、弓術などであり、後者の例が柔術や琉球の拳法であった。社会そのものが“可能性としての戦争社会”であれば、「武術」の基本的目的是“敵を殺傷すること、もしくは殺傷しようとする敵から身を守ること”にあるといえる。

沖縄の場合、琉球王国時代には、近世の在蕃奉行所による武器類の厳しい管理の影響があり、また、個人的な指導のもとに継承されたこともあって、中国から伝わった拳法は「一子相伝」「一家相伝」などという閉鎖的な伝承形態を取って秘密裏に修練された。何らかの敵との戦闘を想定して修練するとすれば、周りの人々に知られないようにということも影響したであろう。

---

(5) 富木謙治は、「武力の発生を歴史的にさかのぼれば、暴力の存在を前提として、それを克服制圧するために工夫された」ものであり、「その武力が一連の技術体系を持ったときに、これを武術または、武芸と称する」としている（富木謙治『武道論』大修館書店，1993年，pp.13-16)。

(6) 空手は、口承では古くは「手（ティー）」と呼ばれていた。前近代社会の琉球において、独自の徒手空拳の武術が発祥したかどうかを裏付ける史料はなく、詳しいことは分かっていない。しかし技や型の特徴、名称から推測して、中国から伝わった拳法が琉球化していったと考えられる。
2. 近代社会の「武道」

「近代」の定義は様々あり、また、それがいつ始まったかについては諸説がある。本書では、後に述べるように、社会学者D. ベルやA. トフラーの定義に従い、「近代」を「近代産業資本主義的国民国家」が形成された時代とし、日本における「近代」の始まりを、一応「明治維新」前後としておく。

近代社会になると軍事も警察も中央政府に一元化され、社会における利害対立を解決する手段としての私的暴力は、制度的には廃止される。他の人間から攻撃を受けた者は警察に届け出る。犯人は逮捕され裁判にかけられ、有罪となれば刑務所に行くことになる。しかしながら、我々の住む近代社会（特にその前期）には、実際には様々な身体的攻撃の危険がある。近年における車内暴力や街頭暴力、女性にとっての蹂躙の危険などもそうである。つまり一応安定した近代社会においても、前近代社会のような相互殺傷の可能性は減少したものの、他からの身体攻撃の危険性は依然としてある。

こうした社会状況の変化に対応して、「武術」の性格も変わっていた。もはや、相互の殺傷を目的とする術は必要ではない。代わって、他からの「暴力」に備えるための技が発達することになる。これが「護身術」としての側面を持つ柔道であり空手であった。しかしながら、他からの「暴力」は、場合によっては死をまねく攻撃もありうる。したがって、直接的な私的武力闘争について考える必要はあまりないが、死の可能性を念頭に置いて心の持ち方が「暴力」に負けない心、真剣な生き方を「精神」として据えることが、時代や世相を反映して強調された。ここから生まれてきたのが「武道」であった。

「武道」においては、一方で、「柔よく剛を制す」とか「空手に先手なし」、また、「敵人の心胸を撃つ」といった理念などが強調され、他方、技の体系も合理的に再構成され、危険な技は避けられるようになった。さらに、闘争に勝つための野蛮さにも近い攻撃性を抑制し、「礼儀」を重んじて自己修養に励む「礼法」が発達した。これらの結果として、柔術は

(7) 木下秀明は、「武道」という言葉が大正時代に作られた造語であることを歴史的研究にしたがって明らかにしている。それ以前は、「武術」と「武士道」はあったが、今日いうところの「武道」という言葉は概念もなかった。彼によると、最初に近代の実用的挑戦の技術である「武術」から精神性を強調した「武道」に移行するのは、1880年代に現れた講堂館柔道によってである。以降、大正年間に、①日露戦争後の精神主義・白兵主義の結果、技術より精神を強調する風潮が現れたことにより、また②「実用の術である武術の身体的修練に不可欠な競技形式から非実用的な技の競技スポーツ化が展開したことに対し、精神強調による是正を意図した」（278頁）ことによって、「術から道」への移行が本格的になされたという（木下秀明『術から道へ—武道の近・現代化の実相』『体育の科学』Vol.48，杏林書院，1998年，pp.272-278）。

(8) 嘉納が、教育的な価値に根ざして柔術各流派の優れたところを集めて柔道に再構成したことや、糸洲による古伝の型の変革と体育としての型の創出などがそうであった。
「柔道」になり、唐手は「空手道」に、合気術は「合気道」と呼ぶようになった。古い武術は、今や単に技の習得を目標とするだけでなく、生き方を修練するための武道へと変わっていたのである。

実際、古い「武術」の「武道」への理念化と再構成は、前近代と近代社会の両方を生きた柔道の嘉納治五郎（1860－1938）、空手の糸洲安恒（1831－1915）、大東流合気柔術の武田聰（1860－1943）、そしてその後に続く俊才達、富名腰（船越）義珍（1868－1957）や宮城長順（1888－1953）、摩文仁賢和（1889－1952）、植芝盛平（1883－1969）などにより、上で述べたような過程を経て進められた。まず、1882年に柔術が「柔道」に、次いで、1929年に空手が「空手道」に、最後に、幾度かの名称変更を経て40年に大東流合気柔術は「合気道」になった。

ところで、近代において、空手が沖縄（琉球）の武術として本土で実演されて紹介されたのは、糸洲の指導を受けて自らを弟子達にとってであった。沖縄の空手は、明治30年代にはすでに体育上の価値が認められ、学校教育に取り入れられていた。中学校や師範学校などにおいても体育や「唐手」部の活動として指導が行われ、明治末期には京都武徳殿の柔道大会に参加した中学生や修学旅行で上京した師範学校の学生達によって「唐手」の型や技が披露されている。いずれも嘉納との関わりが大きく、関東では後に嘉納によって招聘された富名腰が上京して、大学の「唐手」部を中心として指導を行っていくこととなった。また、関西においても宮城や摩文仁をはじめ、バンガキヌーン流（上地流）を名乗った上地完文など多くの沖縄の空手家達の指導が開始されていた。とくに、1922年（大正11）に富名腰（船越）義珍の著した『琉球拳法唐手』の発刊と、大学生を中心として指導がなされたことは、沖縄の空手が広く普及する足掛かりとなった。

(9) 琉球の武術に対する呼び名として、「空手」という字句が最初に現れたのは、1905年（明治38）の花垣長茂の「空手組手」に見られる。また、「拳法」、「唐手」の呼び名とともに、技法的な相違と発生した場所を決して「首里手」「那覇手」「泊手」という俗称があった。1930年代以降になって、空手（道）の呼び名が広く使われるようになっていった。

(10) 1905年（明治38）、学校体育に課された唐手は、運動会、卒業式等において頻繁に演武されるようになった。08年8月、京都武徳殿青年演武大会に柔道の選手として出場した德田安貞らにによって「唐手」の型数番が紹介された様子を学友誌は伝えている（「雑報」『球場』第18号、沖縄県立中学校学友会、1909年、pp. 116-118）。また1906年には、師範学校でも唐手部が設置され、11年、修学旅行で上京した同部員6名が講道館の嘉納治五郎に招かれ、型や試割を披露するとともに「唐手」に対する種々の質問に答える様子が、と同じく学友誌に記録されている（山内盛彬、諸見里朝保「唐手書記録」『龍潭』沖縄県師範学校学友会、1911年、pp. 183-185）。

(11) 「唐手」の普及によって、昭和初期頃から多くの流派が誕生することとなった。これらは、糸洲の「唐手」の体育化によって始まった「空手近代化運動」の大きな流れの一つと考えることができる。これについては稿を改めて論じたい。
嘉納の功績によって伝統的な柔術からの近代化が成功した柔道は、戦前すでに競技化と国際化が進んでおり、それなりの普及をみせていたが、空手が本格的に広がり始めたのは、戦後である。1957年に、第1回全日本学生空手道選手権大会、59年には、第1回全国空手選手権大会が開催され、空手の競技化もしくはスポーツ化が始まった。

沖縄では、戦後から生き延びた空手指導者達によって、戦後間もなく町道場が開設され始めた。また、本土や沖縄を訪れた外国人によって世界中に普及していくこととなった。1956年には、沖縄空手道連盟（初代会長知花創信）が結成された。59年には、新たに開学した琉球大学に空手道研究会が結成され、活動が始始された。現在では、競技スポーツとしては、演武による型（形）競技や、組手では様々なルールに基づく“寸止めによる試合”、“防具を付けての試合”、“フルコンタクトによる試合”などがそれぞれ行われる。一方、スポーツ生理学、心理学、運動学などの科学的な理論に基づいた研究も積み重ねられている。また、学校教育における体験や運動会、学芸祭などにも空手が取り入れられたり、小中高校の研究指定校における教材化された空手の指導法の工夫・改善も行われ、空手人口の裾野は着実に広がっていった。

空手の全国的な組織化や競技スポーツ化が進んだ1960年代は、ちょうど経済の高度成長期にあたる。戦後の復興期が終わり、国民の間に経済的余裕が生まれた。64年の東京オリンピック開催に象徴されるように、経済的余裕と大衆文化の発展がスポーツ人口の増大につながった面もあった。現在、沖縄県の調査によれば、沖縄空手古武道の道場数は、県内、県外、海外を含め1,090カ所となっている（2003沖縄空手道古武道世界大会実行委員会『沖縄空手道古武道道場一覧』2004年）。また、1989年から沖縄タイムス社が主催する全沖縄少年少女空手道大会には、流会派を越えて、毎年2,500名以上の県内の小中学生が参加する一大イベントとして定着している。

近年、この大衆化の傾向は加速し、競技スポーツ化された“伝統空手”から、空手を含めた異種の格闘技の経験を積んだ選手が参加する“K-1”や“ブライド”のようなスポーツ・エンターテイメント、また“マーシャル・アーツ・アエロビックス”まで、空手は大衆化している。こうした空手の大衆化の歴史は、空手家を紹介する名称の変化にも表れている。いくつかの事典の記述では、武田聡角などは「武術家」と書かれ、嘉納治五郎や富名脇（船越）義珍は「武道家・教育者」と記載されている。最近では空手を含む格闘技の名手達は、他のスポーツ同様「選手」として位置づけられるが、再び「武術家」ま

（12）大学や研究機関武道の学術研究調査を目的に、1968年（昭和43）、日本武道学会が創立され、昨年までに38回の大会を開催している。
たは「格闘家」などと紹介されることも多かった。

競技化による空手人口の増大は喜ぶべきことであろうが、一方、過度の「競技スポーツ化」によって「精神的側面」の希薄化を憂える人々は、「武道としての空手」を強調する。確かに、生死を賭けて闘う“武術の側面”をより高い段階の人間形成へと導くことや自己抑制、礼を重んずる内面の陶冶を強調する“武道の側面”は、空手の歴史的遺産であり、そこから学ぶものは多い。実際、野球やサッカー、バレーボール、水泳などといった他の近代スポーツとは異なり、空手などの武道を学ぶ若者は、身体的鍛錬とともに精神的修練の意義をその特徴としてあげることが多い。人間が人間として生きていく限り、いつの世においても身体と精神の鍛錬は必要であり、そのために今後とも空手の“武道の側面”は歴史的遺産として残るであろう。

しかしながら同時に、「近代社会」が終わりつつあり、今後ますます「ポスト近代社会」（近代の後に来る社会、つまり「後近代社会」）の特徴が現れてくる現代という時代にあって、どのような新しい空手の理念や技能が必要になってくるのかも問われている。

これまでのスポーツの発展・大衆化の歴史はまた、良い意味でも悪い意味でも民族主義の高揚と国民国家の形成にスポーツが利用される過程でもあった。たとえば1930年代のドイツでは、それまで一部の上流階層のものであったスポーツやレクレーションを、多くの庶民は生まれて初めて楽しむことができた。多くのスポーツクラブが作られ、社交と健康増進の中心となったが、そこはまた、人々が「強健な兵士」になる基盤が作られ、他方ベルリンオリンピックなどで国威を発揚するために活躍する「国民」を作り出す場でもあったのである。

このような性格を持った「近代社会」とは、仮に人類の有史を1万年の歴史とすると、18世紀中葉の西欧に始まった産業革命と市民革命以後のわずか250年後の時代を指すに過ぎない。しかしながら、今日の「情報革命」を牵引として発展しつつある先進諸国を中心として、世界史的には、人類は「後近代社会」に移行し始めたと社会学者達は考えている。

(13) ここでいう「近代社会」とは、ダニエル・ベルやアルビン・トフラーその他の社会学者によって産業資本主義の国民国家」として特徴づけられた社会のことをいう。その社会では、規格化、一元化、集権化、巨大化、同時化、専門化が進み、市場経済を基礎とした「大量生産、大量消費、大量廃棄」が行われる。この市場における利潤や効率性の追求を旨とする大量生産・大量消費という行動は、単に物財のそれ自体を求まらない。たとえば、テレビ放送によって大量に配信されるプロスポーツ競技の映像もまた、そういう側面を持っている。より多くの人々の健康の増進と喜びの増大に寄与するスポーツの発展・大衆化は、一方ではスポーツの市場化の発展の歴史でもあり、それらは密接に結びついている（D.ベル『不工業化社会の到来』上・下、内田忠夫・嘉治元郎他訳、ダイヤモンド社、1975年、A.トフラー『第三の波』小沢さとる訳、中央公論社、1982年を参照）。
具体的には、筆者たちは1990年前後に起こった一連の変動——冷戦の終結、コンピュータとインターネット技術の革新、ヨーロッパ連合（EU）の形成、経済のグローバル化によって「情報化社会」に移行しつつあると考えている。「後近代社会」とは、簡単にいえば、規格化、画一化、集権化、巨大化、同時化、専門化を原理とする社会組織と市場経済を基礎とした「大量生産、大量消費、大量廃棄」の近代システムを克服した社会の理念型である。そこでは、近代の「集権的市民国家」にかわって、「分権的で多層多次元の統治システム」が現れ、情報産業などの第3次産業を中心としグローバル化した経済システムへ移行する。それについて、近代の排他的で画一的な民族意識にかわり、人々が多様で多様な文化やアイデンティティーを持つに至ると考えられている。たとえば、すでにヨーロッパ連合（EU）において、人々が自分はペネチア人であり、同時にイタリア人であり、ヨーロッパ市民であると感じているように。

では、「後近代社会」に移行し始めたこの21世紀初頭という時代において、どういう形での空手の再概念化や技術の発展の可能性があるのであろうか。

3. 後近代社会における「武芸」

次章以降では、沖縄空手の持つ3つの側面、21世紀の空手の基本理念について論ずるが、その前に筆者らの提唱する「武芸」の概念について検討したい。すでに述べたように木下によると、前近代社会においては、実用的戦闘の技術としての「武術」と武士の精神的態度（倫理）を示した「武士道」という言葉や概念があった。しかし、格闘技術としての「武術」を越えて、「武道」という言葉の概念が作られ広まったのは、主に20世紀初頭である。つまり、現在用いられるところの「武道」という言葉は、近代社会の造語であるということである。

筆者らは、前近代の「武術としての空手」と近代に始まった「武道としての空手」の歴史的経過を尊重しつつ、21世紀の後近代の「武芸としての空手」を提唱したい。では、日本に古来から使われてきた「武芸」という概念を改めてここで検討してみたい。

広辞苑によると、「芸」には、「修練によって得た技能。学問。わざ。」という意味がある。一方「武芸」という言葉は、「武道についての技芸。弓・馬・剣・槍・銃砲などの術。武技。武術」を意味する。この意味での「武芸」と「武術」はほぼ同じ意味である。実際、

（14）もちろん、世界の大多の国々はいまだ近代化の満中にある。したがって、ここで「世界史的にある」という意味は、あくまで先進国を中心にして見た方であることを断っておきたい。
（15）さらには、「技能をともなうあそびこと。あそびごとのわざ。また、機知や工夫」（広辞苑）といった意味もある。
「武芸十八般」という武術訓練がある。

しかしながら、ここで興味深いのは、「芸」には学問という意味もあるということである。つまり、「芸」は技能と学問の両方を含む。他方、日本語の「芸」の英訳はartであり、技術、芸術、芸、芸術を意味する。ところが、その複数形である「arts」には中世の自由科目（文法・論理学・修辞学・算術・幾何学・音楽・天文学）の意味と現代の大学の教養科目（語学・文学・哲學・歴史）などのいわゆるLiberal arts（自由科）の意味がある。これらの科目は、しばしば芸術科目とともにArts and Humanitiesとも総称され、職業的専門科目に対して、教養を高めるための科目とされる。また「arts」の古い語法では、「芸芸」（learning）そのものを指す意味もある。したがって、日本語の学問を含む「芸」の意味と英語の自由科目を意味する「arts」は、重なり合う。結論から言えば、日本語の「芸」も英語の「art」（複数形arts）も、「技能・芸芸」と「学問」の両方の意味を持っているのである。

これらのことを念頭に置くと、「武芸としての空手」という場合、技能的鍛錬と同時に学問的教養としての心身の修錬を目指す空手という意味になる。これには、近代の「武道」が、精神的修錬といいながら実際は、「武人としての生き方」を目標としていたのとは対照的であろう。近代の「武道」は、当初、武士のいなくなった時代の「武士のたしなみ」として学ばれた。次いで、武士以外の人々、つまり庶民が「武士のような精神」を身につけるために学んだ。

しかしながら後近代社会の空手は、一般市民が教養を身につけるために、教養の一つとして空手を学ぶことを目標とすることができる。まさに「芸」とは、学問と技能の両方を含み、「arts」を学ぶことの意義は、狭い専門人（たとえば軍人や警察官、武道家）などを目指すためではなく、教養を身につけることによって“自己を無知蒙昧・粗野の状態”から解放することに有るといえる。そうした意味では、もしが新近の「武術」が、武士・戦士を訓練するためのものであり、近代の「武道」が、軍人や警察官、体育教員、ごく一部の武道家などへの訓練を中心とするものであったとすれば、後近代の「武芸」は、より多くの一般市民（男性、女性、子ども、高齢者、身体障害者など）の教養修得を目標とするものになることができる。もちろんこれは、空手が競技スポーツや特定の職業的訓練のために学ばれてはいけないということではない。それは必要であろう。ここで強く主張したいことは、21世紀の空手をより広い文脈的な視点からの位置づけを行うこと、それによって、今後より多くの人が、教養のために気軽に空手を学べるようになることが必要とさ

(16) ただし、近代以降に本土へ伝承された琉球の拳法は、「武芸十八般」の中には含まれていない。
れることである。この点に関しては、次章で、“文明性・自己抑制の発達”という意味での“礼節作法”の発展と琉球・沖縄空手の“文人的伝統”のところで詳しく述べたい。ここでは取扱うえず、21世紀の「後近代社会」における空手の発展のイメージを提起するに留める。これら
のことを念頭に置きながら、さらに、21世紀の空手の理念について検討してみたい。21世
紀の空手について、筆者らは「人間性解放の空手」（Human Liberation Karate）もしくは単
に「解放の空手」（Liberation Karate）と表現している。では、その内容を見てみよう。

III 沖縄空手の21世紀的発展 — “解放の空手”の基本理念

1. 現代沖縄空手の3つの側面

21世紀における空手の再理念化とさらなる発展の可能性を考えるにあたっては、幾つか
のアプローチが考えられるが、ここでは2つのアプローチでそれを検討してみたい。1つ
は、現在、実際に空手を学んでいるか学ぼうとしている人々、また、空手の指導者に対し
てアンケートを取り、その人達の空手に対するイメージや要望を調べて参考にすることで
ある。何事も、今現在生きて生活している人達の考えや要望を理解することなくしては、
前へ進めないであろうから。

もう1つのアプローチは、歴史を通じて沖縄空手の置かれた社会的環境を探り、底にあ
る伝統的価値観の影子のうえに新たな理念を探り出すことである。しばしば文化的発展と
いうのは、ある文化的実践の原点に返ることやもともとあった要素を“再発見”し、新し
い歴史的コンテキストで再構成することによって行われる。(17) もし“歴史は常に現代史であ
る”という表現を借りるなら，“文化は常に現代文化である”ともいえる。ここでは、ま
ず最初のアプローチを行い、次に、歴史文化的分析を付け加えていく。

まず最初のアプローチに関しては、2つのアンケート結果を参考にしたい。1つ目のア

(17) 例えば、ルターの宗教改革は、信仰の基礎を（教会ではなく）聖書自体に置くことの一
種の回帰であった。ルネサンス期から18世紀にかけて高度に発展したヨーロッパ写実絵画の発展後、
色彩そのものや抽象的線を強調した印象派や立体主義の抽象絵画が現れたが、これらは東洋の
装飾画やアフリカの原始芸術に影響を受けた結果であった。近年の歴史学における「物語主
義」の復活は、100年にわたる「科学的歴史研究」の努力の後に、ストーリーとしての歴史の
役割の再評価に基づくものである。
さんケートは、琉球大学の男女学生35人に対して行われた。質問は、(1)自分の体力の程度、(2)自分のスポーツ・運動文化に対する興味、(3)空手に対するイメージ、(4)「授業内容」を受けて、どのような授業を期待するか、の4項目である。分析の方法としては、まず質問(3)と(4)の答えとして書かれた「内容」をすべて抜き出し、次に、その内容を類似カテゴリにまとめていくという方法を取った。たとえば、「空手に対するイメージ」に関しては、闘う手段、礼儀作法を重んじる、野蛮、強い、護身術、日本を代表する武道の1つ、沖縄の伝統、といった内容が書き拔かれた。次に、「どのような授業を期待するか」について、柔軟性や筋力の向上、型を学びたい、礼儀作法を教えて欲しい、歴史などをやってくれることを期待する、身体能力や精神能力を高めていきたい、自分なりの空手文化の継承をしたい、体力の向上、沖縄の文化としての空手を学びたい、などの内容があった。少し変わったものでは、ある女子の「高校時代の友人が小・中と空手をやっており、体が丈夫で姿勢が良く養ましかった。それを見て少し空手に興味を持った。あと、私はすぐに呼吸が乱れたり、のぼせたり、冷えたりと、どうも自律神経失調性の気があるのだが、空手で精神を鍛えればそれらの症状も改善するのではないかと思ったから」というのがあった。

最終的に、空手に対するイメージおよび授業に対する要望の内容の分析から、沖縄現代空手の3つの側面が浮かび上ってできた。それは、スポーツ性、精神性、文化性の3つである。「スポーツ性」とは、身体運動としての空手であり、身体能力の向上、受け・突き・蹴りや組手などの技能の修得、競技に勝つための訓練、護身術の修得などの面をいう。「精神性」とは、精神集中、自制心、気力、胆力、落ち着きなどの精神的鍛錬の側面をいい、これらは礼法の習得、瞑想や呼吸法、流派によっては座禅その他の方法によって鍛えられる。「文化性」とは、空手の歴史に関する知識の学習、伝統的型の修得・継承、社会的教養を身につけた身体動作の形成や行動パターンの実現をいう。もちろん、これらの3つの側面は相互に関連しているから、図−1のように、相互に重なり合った3つの集合として表すことが出来る。

しかしながら、現代空手のこのような3つの側面は、多くの場合既に終わったり、たとえば実施されていたとしてもアンバランスで不十分であることが多いと思われる。たとえば、流派によっては、型の練習は最低限に留
まち、競技のための筋力やスピードの鍛錬に多くの時間が費やされる。また、精神面の鍛錬といっても、実際は練習や試合の前や後で行う形ばかりの礼儀作法などを「礼法」の修得と呼んだりする。型の修得を行わない生徒はいないであろうし、「空手に先手なし」などの基本理念を学ばない者はいないと思うが、空手の歴史や思想の内容まで踏み込んで学び考える者は少ないであろう。さらに、空手の文化社会の意義について考え、それを人類社会の「文明性」の向上まで結び付けて深め、実践しようとするものはもっと少ないであろう。

２つの目的アンケートは、沖縄県で開催された「2003沖縄空手道古武道世界大会」（2003）に代表選手を出場させた道場主と大会役員となった道場主に対して行ったものである。「道夫主の経験」、「道場経営」、「空手道・古武道に対する意識」について、対象者56名中30名から回答を得た。ここでは、道場主の「空手道・古武道に対する意識」について見てみよう。空手古武道の鍛錬が、「体力面」や「精神面」にどのような影響を及ぼしているか、「体力面」を「防衛体力（病気に対する抵抗力）」、「パワーチップ」「スピード」「スタミナ」「テクニック」の五つ分類して質問したところ、「スピード」「パワーチップ」「防衛体力スタミナ」「テクニック」の順位で練習効果があると捉えられていた。同様に「精神面」への影響では、「礼儀」「思いやり」「徳性」「不撓不屈」「協調性」など12の因子から3つ以内を選択して答えてもらったところ、「礼儀」をあげた道場主が際だつて多く、続いて「徳性」「思いやり」「不撓不屈」の順であった。つまり、指導者らは、空手古武道の鍛錬によって、体力面では「スピード」「パワーチップ」重視した技能の修得ととともに、精神面では礼儀作法や徳性の育成という武道一般に見られる自己抑制、礼を重んずる内面の陶冶を重視していることが浮き彫りになっている。

また、沖縄の空手古武道と本土や・海外で指導されている空手古武道を比較してどう思うかという質問に対して、約8割の道場主が、異なり答えている。理由として最も多くあげられているのは、現在沖縄で行われている型の演武法や鍛錬法と異なることや競技スポーツ化された空手古武道のあり方についての意見であった。具体的には、本土や外国は、型や型の分解、断の解釈に異なる点がある。試合で審判の目を良く映るよう改良されている、試合に勝つことにこだわりすぎているなどが挙げられている。反省すべき点として、本土や外国の空手は先見性が非常に高く、沖縄も時代のニーズに応えるべきという意見も見られた。全般的には、沖縄の歴史と風土に根ざして発展してきた伝統文化としての空手

(19) 嘉手谷徹「2003沖縄空手道古武道世界大会に伴うアンケート調査について—道場主の経験、道場経営、意識調査－」『史料編集室紀要』第30号、沖縄県教育委員会、2005年、pp. 29-52.
史料編集室紀要 第31号 (2006)

古武道に対する特性を強く感じており、その伝統を守り発展させていきたいと考えられていることが読み取れる。つまり、文化的側面が強く意識されているということである。

さらに、今後の空手古武道の発展にとって必要なこととして、伝統的な型を正しく継承する、競技スポーツとしての練習と伝統的な練習はきちんと分ける、学校教育への導入を強化する（小学校から体育へ）、本土や外国から訪れる愛好者との交流や受け入れ態勢を強化する、本土、海外に広く普及したが沖縄において質的な向上を図る必要がある、沖縄の空手団体が一致団結する、県（行政）にしっかりバックアップしてもらう、沖縄の伝統文化（文化遺産）として発展させるなどがあげられている。

以上2つのアンケート結果は示唆的である。では、こうした学生たちが持っているイメージや要望から浮かび上がった空手の3つの側面と指導者たちが持っている空手の伝統の維持と発展の方向性は、今後どのような理念によって、再定義され再構成される必要があるのであろうか。かつての封建時代の「武術」が近代社会の「武道」になったように、近代社会の「武道」は後近代社会においてどのように変るかを知る必要がある。沖縄の歴史的経験や伝統に根ざしつつ、さらにはそれを人類社会の向上に役立つような普遍的な理念や普遍的な価値観は何であろうか。ヨーロッパ貴族の「騎士道」が近代スポーツの「スポーツマンシップ」につながり、さらに「スポーツマンシップ」の精神が「公正さ」や「ルールの遵守」などの観念と結びついて、民主主義や人権思想の形成・発展にも寄与したように、21世紀の文明の発展にとっても寄与するような空手の理念とは、何であろうか。

では、もう1つのアプローチである歴史を通じて沖縄空手の置かれた社会的環境を探り、底にある伝統的価値観の象徴のうえに新たな理念を探り出す方法を次に見てみよう。結論を先取りして述べると、そのような空手を筆者らは、人間性を解放するような空手であろうと考えている。沖縄の歴史的経験や伝統に根ざし、それから発展した「解放の空手」の主要な理念は、「空手に解決あり」となる。それを支える3つの理念は、「害心攻撃なし」、「命がけ宝」（生命尊重）、「文武の発展」（文武発展）である。これらの理念をもしくは価値観は沖縄の歴史的経験をいっそう普遍化したものである。深い精神性と文化性に支えられた空手こそが、新しい時代の空手になりうるであろう。それでは、その内容について見てみよう。

2. 第1の理念 「空手に害心攻撃なし」—Avoide Harmful Aggression—

空手の組手の技はすべて、「受けで突く」ことを基本にしている。おそらくこれは、世

(20) このような状況において沖縄県では、平成9年に全国に先駆けて「空手・古武術」が県指定無形文化財に指定されており、これまで9名が保持者として認定されている。
史料編集室紀要 第31号（2006）

世界的な武術のなかでも特異なものであろう。軍事的合理性を貫徹しようとする、「先手必勝」「攻撃に勝る防御無し」といった戦略や戦術になりやすいであろう。孫子によれば、「兵法は诡道なり」とあり、謀略を用い敵を欺くことを常とする。実際、たとえば日清戦争、日露戦争、太平洋戦争のいずれも、奇襲によって始められた。したがって、「攻撃の効果性」という軍事の論理に従う限り、全体を強化する必要のある防御よりも、攻撃の方がはるかに有利である。軍事的観点からすれば、一般に攻撃は防御よりも有利である。さらに技術上、防御は攻撃よりも難しい。黒沢明の映画「七人の侍」のなかで、侍のリーダーが「防御は、攻撃の十倍難しい」と農民に言う場面がある。確かに、織田信長の桶狭間の闘いからドイツ軍のベルギーへの電撃作戦、日本軍の真珠湾攻撃、2001年9月11日のニューヨーク／ワシントン同時多発テロなどを見ても、攻撃は敵の隙を突いて弱点を叩けばよいのであり、それはいわば“瞬時”に出てくる。しかし、防御は、長い時間を掛けて全体を強化しなければならない。フランスは、独仏国境に数年をかけて400キロメートルにも渡るマジノ要塞線を築かなければならなかった。現在アメリカ政府は、次回のテロ攻撃を防ぐために膨大な軍事予算の増額から始まって、警察・情報関係法令の改正、“緊急時ににおける地下政府”の構築、空港・政府関係ビルの警備強化などを目指している。

しかしながら、軍事的論理優先の前近代社会においてならざる知らず、近代社会においては市民社会の論理がある。そこでは、「攻撃」ではなく「防衛」が、「軍事的勝利」ではなく「司法的解決」が必要とされる。今や「攻撃行動」は、国家間では「侵略」と呼ばれ、個人間では「暴挙」と呼ばれる。過去の「武人的行動原理」は「市民的行動原理」に変わらざるをえない。これらの変化を反映し、富名脇（船越）義珍は心技両面において“先手非道”を説き、それを「空手二十箇条」のなかで、「空手に先手なし」と表現した。この「空手に先手なし」という思想は、武術（軍事）が武術（軍事）の論理を越えようとするという意味において、世界的にもきわめて独創的な思想であろう。ちょうどそれは、クラウゼヴィッツが「戦争は政治の手段である」と考察したり、毛沢東が「敵が進めば我退き、敵が退けば我進む」と説いたような軍事思想における画期のように、武術思想における画期のように思える。

しかしながら、“先を見通して人よりも先に事を行う”という意味での“先手”は、我々が生きて生活していくうえでの積極的な意味もある。この場合には、“自らが先に切り開く”、“イニシアティブを取る”という意味で、生活の中でも競技の中でも必要であろう。

(21) この思想が如何に画期的かは、競技空手を主とするある流派は、「先手なし」という表現を“実社会での攻撃やスランプを防ぐ精神的態度”であり、実際の試合では“先手必勝である”としていることからもわかる。
実は、「攻撃」には「攻撃性」と「積極性」の両方の側面がある。英語で言えば、「攻撃」はattack、offenseにあたり、「攻撃性」はaggression、「積極性」はpositiveness、initiativeなどにあたる。こうした違いは、軍事思想においては区別されない。「攻撃性」を持った人間が「積極的」に振る舞うのが、「攻撃」であるから。現在でも一部の流派では、「先手を取って攻撃する」という表現のなかで、この違いは区別されていないと使われている。「カラテキッドII」という映画の中で、主人公とライバルが試合をする場面があるが、負けそうになったライバルのコーチが「非情にやれ」（No mercy）と選手に耳打ちする。これほどでは、勝つためにはなんでもするという態度の表われであろう。そこまではいかなくても、フルコンタクトの試合の朝には、血の滴るピフテキを食べて攻撃性を高めるなどということが行われたりする。

これに対しては、他のスポーツ選手が栄養剤を飲むのと同じではないかと反論されるかもしれない。また実際に重要なことは、選手の個々の問題のある行為ではなく、理念や鍛錬や技法の全体的体系であると言うこともできる。しかしながら、この問題を理解する鍵は、先に述べた「攻撃性」と「積極性」の区別であろう。一般に社会心理学では、「攻撃性」は「積極性」と区別され、前者は「他者に危害を加えようとする意図的行動」とされる。先に述べたように、前近代の軍事的観点からすればその2つは区別されない。市民社会の論理がそれを区別するのである。実際、富名諦（船越）の「空手に先手なし」の言葉は、まさに我々が持っている「攻撃性」や「攻撃心」を抑制するという意味としても使われている。したがって「空手に先手なし」という表現を、「空手に害心攻撃なし」という表現でいっそうその意味を明確にしたい。

さらに以下のように、21世紀に向けてさらに普遍的な意義を、この言葉に付与したい。我々の日常生活には、様々な害心をもった様々な攻撃行動がある。そのような害心は、自分をも他人をも攻撃し傷つける。空手を学ぶ者も、もし他から攻撃され傷つけられような場合、身を守ることが必要なこともあるかもしれない。競技において、突きや蹴りの一撃をすばやく入れるのも行われるであろう。しかしながら、どのような場合においても、害心を持って攻撃を行うのではないことを念頭におきたい。強さやスピードなどを身につけられる筋力や敏捷性の鍛錬においても、実際の試合においても、また日常生活においても、「害心」を持たないということは大切であるように思える。

（22）大瀬憲一『人を傷つける心：攻撃性の社会心理学』サイエンス社、1993年、p.6。攻撃性が他者ではなく、自己に向けられる場合には「自傷行為」なる。
3. 第2の理念 「空手に解決あり」—Seek Resolution—

上で述べたように、「害心を持たない」ということは、「攻撃心」や「報復心」、「復讐心」を持たないことも意味する。他人間の攻撃に対して応酬を行わないというだけではない。個人間の私的な攻撃の改善はもちろんのこと、警察力や軍事力などの実力の行使においても、「法の支配」に基づいた合理的に適度ある行動を取るか、もしくは実際の実力行使歩み手前でその必要性をなくすということをも意味する。「解放の空手」は、我々一人一人の人間挑戦が時に、実力や武力の行使を発生させるような状況を作り出すことを理解し、そのようなジレンマを解決することを目指す。

したがって、「解放の空手」の目標は、「解体」にある。「闘わずして勝つこと」でも「柔らか剛を制す」でもなく、勝敗の論理や力の論理を転換し、抗争状況の解決そのものを目指す。それゆえ「解放の空手」の極意は、「寸止め解体」にある。「寸止め」によって、抗争状況の「空無化」を実現するのである。もちろん、実際の空手の経験では、受け・突き・蹴りの技能が必要であり、約束組手や実際に身に当てて行う練習は当然あり得るし、必要でもある。また、防具を付けた試合やフルコンタクトの試合では、ルールがあるものの、直接当てることを目的とした攻撃があり、防御がある。

しかしながら、21世紀に必要とされる理念の具現化として、また実際に技能行使上の難易さや一撃必殺を可能にする精神的修練の高さを考慮しても、「寸止め解体」は、極意にふさわしい。抗争的状況が発生した場合に、「打ち合い」による武力的解体を決意し、それを実際に行動に移すことは可能である。しかし、一撃必殺（もしくは「一撃必倒」）の一瞬手前で、それを止めるということは、心身両面から余程の修練を積んだ者でなければできないであろう。なぜなら、身体技術上の困難さと同時に、殺傷を不可とする近代社会の原則そのものを冷静に受け止めて実践に結びつけることになるからである。肉体的、技術的、精神的「強さ」は、実際に実力を行使することや誇示することによってではなく、むしろそれを「空無化」することによって表現される。ここで言う「空無化」と
は、抗争状態の発生した状況そのものを解決することを意味する。“闘い”ではなく“解
決”、“攻撃・防御”ではなく、“空無化”，それを21世紀の空手は目指すであろう。
ここで「寸止め」の意義について、もう少し詳しく検討してみよう。「寸止め」について
は、従来その哲学的意義について十分吟味されてこなかった。言わば「寸止め」は、試合
をする上での実践上の便宜から「消去法」によって位置づけられたに過ぎない。つまり、
空手の型の練習だけでは実践の感覚は身に付かず、また近代社会のニーズに対応して「競
技化」は必要である。しかし、前近代の空手術の「一撃必殺の技」では危険なので、寸止
めを行う。一方、防具付き試合やフルコンタクト試合では、ボクシングかムエタイだっ
たようになってしまい、空手の持つ様式性が希薄になる。少なくとも、寸止めは、空手の「一撃
必殺性」と「様式性」そして「安全性」の条件を満たした一種の妥協として選ばれたとい
うわけである。
しかしながら、寸止めの今日的な理念上の意義は、身体的実力行使を旨とする武道にあ
って、その中にある武力の論理を超える論理を秘めているところにある。武術の「一撃必
殺」、武道の「先手なし」の理念の上にいわば重層的に、“解放の空手”の「害心攻撃なし、
防御なし、解決の実現」の理念を具現化しているのである。実際の寸止め試合を見ても分
かるように、相手が攻撃の意思を見せた瞬間をついて、カウンター攻撃の形で自分も「一
撃必殺の拳」を繰り出す。しかし、相手の体に実際にダメージを与え粉砕する一歩手前で、
それを止めるのである。
ここにあるのは、21世紀の社会にふさわしい武力の意義付けとその用い方であろう。単
に、身体の物理的能力の誇示や、防御のみといいながら実際は「精神的威圧」で勝とうと
する姿勢（したがって、実際に相手が吸り掛かってきた場合はそれに応じざるを得ない）
、「私闘」はしないが先手必勝であるとする主張などを越えて、実力行使を行おうとする目
的は、“それを必要とする状況の解決”にあるということを表現している。それゆえ、相手
の肉体動作の制圧もしくは相手を殺傷する寸前に、それを避ける。なぜなら、紛争の解決
は、私的な実力の行使によって行われるのでなく、それに関与しないことによって行わ
れるのであるから。仮に実力行使がなされても、相手を粉砕する最後のぎりぎりのところで
止める。また仮に、実力行使が実際に相手の身体にダメージを与えるまで進むとしても、
それは個人的判断としてではなく、法の手続きと整合性をもったものとして行われなければ
ばならないのである。
「寸止め」は、実力の行使に潜むジレンマの解決の一つの方法であろう。自分も相手も
害心を持たない様にし、仮に実力の行使が発生する状況が生じても、“一撃必倒”（もしく
は伝統的表現を使えば、「一撃必殺」）の一歩手前で止めるというのは、実際の実力行使よ
りもはるかに困難であり、いっそうの修練を必要とする。ある意味では、防御することはたやすい、攻撃することはもっとたやすい。しかし、相手を粉砕する一歩手前で突きを止めるというのは、技能的にも精神的にもはるかに難しい。何らかの形で自分も相手も傷つくような実力行使のジレンマを、すなわち暴力行使のジレンマを解決する1つの方法と想を、「寸止め」は示唆しているように思える。

ここで、近代空手の存在理由の一つである「護身（＝自衛）」の論理について、考えてみよう。近代社会は、いまだ様々な暴力（＝身体的危険の可能性）に満ちている。特に、昨今のような経済不況と社会的不安定の時代には、可能性としてだけでなく現実的にも多数の暴力事件が発生している。このような時代における「護身術」に、特に女性（場合によっては、子どもや高齢者）にとって最低限に身を守る身体技能は必要であろう。しかしながら、問題はそのなかに潜む論理の呑味が、十分にされていないことである。

ある空手流派は、教本の防御法の章の頭に「“空手に先手あり、私闘なし”」と掲げ、「先手なし…」は、明らかに敗勢や、無謀、そして強力な武器をもつものに対しては、空虚に等しいと思われる…。争いの起こる必然的な気配を察したときや、競技の中では、先手のあるものです。」と書いている。確かに、競技空手では先手による攻撃はあるし、差し迫った街頭での暴漢＝暴力に対して、護身＝自衛の必要ということもありうる。しかしながら、街頭で攻撃してくる暴漢に反撃する場合、たとえ自衛のためだとしても、それは「私闘」にはならないだろうか。こちらを殺傷しようとする者に対する「正当防衛」ということはありうる。しかしながら、近代の法治国家においては、ある行為が「正当防衛」であるかどうかを判断するのは個々人ではなく、裁判所である。したがって、近代市民社会における個々人の実力行使の行動は、少なくとも法律的には常に「私闘」である。

さらに、また、相手が武器を持っている時、ほとんどの場合、一番有効な行動は逃げることであろう。銀座でのケンカで腹を刺されて死んだ力道山の場合のように、武器を持った相手に立ち向かうことは危険である。相手が2〜3メートル離れた所に立って拳銃を持って狙っている時、逃げることが不可能な場合にできることは、両手を挙げて抵抗の意思が無いことを示すことである。社会心理学の研究は、こちらが抵抗や反撃の信号を示すと相手はいっそう攻撃的になることが多いことを示している。

(23) 前掲大渕（1993）のほか、以下の文献を参照。R.パロン『人間と攻撃』度会好一訳、日本ブリタリカ、1980年。I.Dカーニ、F.I.エリングフ編『攻撃性の自然史』香原志勢、鈴木正男、田中次郎、西田利貞共訳、ベリカン社、1971年。島井哲志、山崎勝之編『攻撃性の行動科学：健康論』ナカニシヤ出版、2002年。山崎勝之、島井哲志編『攻撃性の行動科学：発達・教育論』ナカニシヤ出版、2002年。
これらの例は、護身＝自衛のための空手や武道が必要ではないということを言っているのではない。もちろんそれは必要である。とくに、とっさの危機を回避するためには様々な方策がとられることとなる。しかしここでの要点は、「護身＝自衛」に21世紀の空手の存在理由の基礎を主に置くことは、不十分ではないだろうかということである。「護身＝自衛」の論理以上のより高い理念、より普遍的な理念が21世紀の空手には必要とされているということである。

“攻撃－防御”（もしくは“防御－攻撃”）、“攻守一体”、“護身－自衛”、“先手はあるが私関なし”といった論理を超えるのが、「解決」の概念である。武道のなかにある実力（武力）行使の論理を基礎としつつ、さらにそれを越える論理を持つ必要がある。これまで述べたように、「寸止め」がその技法的表現である。

4. 第3の理念 「生命の尊重」（生命尊重）－Respect Life－

個々人の生命の尊重は、自由や平等と並んで近代市民社会の重要な原理の1つである。暴力的な前近代社会においては、個々人の生命は必ずしも尊重されなかった。集団間の生存競争の圧力がありにも強く、そのために人々は絶えず戦争に繰り出され、共同体を守らなければならなかった。特に戦士集団である武士には、この要求は強かった。「いざ鎧倉」となれば、何を置いても駆けつけ戦闘に参加しなければならなかった。戦闘に参加するということは、当然、死を覚悟するということである。したがって、この時代の武道を為すものの心得は、「武士道といふは死ぬ事と見付けたり」（藤原種長）である。

近代社会においては、国内における戦闘はほとんどなくなったが、そのかわり国外における戦争は頻繁に起こった。近代を通じて対外戦争を行わなかったのは、ごく少数の国だけである。ほとんどの国は、侵略か防衛かを問わず、何らかの対外戦争を経験している。無数の国で革命戦争や内乱、植民地戦争が起きている。その意味でまじめに20世紀は、戦争と暴力の世紀であった。このような時代にあっては、主君のために死ぬことはなくなっただけに、国家のために死ぬことは必要とされた。特に軍人は死を恐れはならず、武人の精神を持って敵軍と交戦しなければならなかった。

しかしながら、21世紀においてこのような「死の哲学」は、それだけでは不十分であろう。人間生活の至る所にある死の可能性を前にして、動揺しない心構えは必要である。瞑想や身体の修練を通じて、このような心性を養うことは大事である。しかし、「死の哲学」は「生の哲学」によって補完される必要がある。なぜなら「いかに死ぬべきか」を考えることは、「いかに生きるべきか」を考えることだからである。また、建前とは裏腹に、幾つかの中学校や高校、大学では、鍛錬と称して人権蹂躙に近いようなしごきが行われた
りしている。その結果、学生が死に至ることもあり、生命そして人権の尊重という理念は、何度でも繰り返して学ばれるべきであろう。

この点に関して、悲惨な沖縄戦を通して沖縄の民衆が到達した境地は、「命どう宝」（命こそ最も貴重なもの）である。この「命どう宝」という表現は、1879年首里城明け渡しの際に尚泰王が詠んだとされる「戦世もすまち、弥勒世もやがて、嘆くなよ臣下、命どう宝」と由来するという説や元々は沖縄芸芸の台詞だったという説があり、はっきりしない。いずれにせよ、「鉄の暴風」と呼ばれた沖縄戦を経て、沖縄の民衆が心の底から“命こそ宝だ”と思い、その表現が戦後広がったのは事実である。苛酷な独立戦争を闘ったアルジェリア人や内戦の辛さを経験したコソボ人にせよ、テロリストの攻撃を受けたニューヨーク人にせよ、お互いの生命を尊重しようと心底思わなかった人はいないであろう。「戦世もすまち、弥勒世もやがて」（戦争の世も終わり、弥勒菩薩の来迎する平和の世もうすぐやって来る）という表現の中に、まさに戦争と暴力の時代であった近代の後に、諸民族の平和共存を実現しようとする後近代のイメージが表されている。

「命どう宝」もしくは「生命の尊重」という理念は、他方、一人一人の個性や権利を尊重するという姿勢にもつながる。近代社会が、画一的な価値観やナショナリズムの押し付けによる「同一化社会」であったとすれば、21世紀の後近代社会は、多様な価値観を持った多様な人々の個性とニーズを尊重しつつ、お互いに協働していく社会を目指される。したがって、21世紀の空手は、多様な価値観を持った多様な人々の個性とニーズを反映した訓練プログラムを作る必要がある。より多くの人々が教養の一つとして空手の良さを享受するためには、「女性空手」、「子ども空手」、「高齢者空手」、「障害者空手」、「赤ちゃん空手」、「エコロジー空手」、「イメージ空手」、「癒し音楽空手」、「健康体操空手」など構想する必要もあるのではないだろうか。女性や子ども、高齢者、身障者の空手は、すでにいたるところで実践されている、といわれるかもしれない。しかし、“生死を賭けた闘い”の可能性を前提とした格闘技としての空手は、究極的には精神的に肉体的にも極限の域を理想とするものである。女性や子ども、高齢者、身障者などの立場に立った上での訓練プログラムを、より明確に位置づけて開発していく必要があるのではないか。
も行った。彼は、ナイハンチ、バッサイなど7つの古式型に含まれる人間性を否定するような技を改良し、また、新たにピンアン（初段から五段）、ナイファンチ（二段、三段）を創案し普及させた。やがて、船越義珍や宮城長順、摩文仁賢和らによって、旧帝大や旧制高校、中学などの教育機関で指導されるようになり、そして広く一般に広がっていった。

したがってこの時代は、前近代社会に生まれた武術唐手が近代化し、大衆化していく最初の時代であった。第2次大戦後は、体育的な見地から捉え直された近代空手が、学校教育の場や一般の人々に柔道や剣道などと同様の武道として捉えられ、普及していた第2の空手の大衆化の時代である。そしておそらく21世紀が始まった現在は、空手の第3の大衆化の時代と位置づけられるよう。国内でも国外でも、多くの人々が空手に興味を持ち、学びたいと思っているのであるから。とくに沖縄には、空手を日本文化としてだけでなく、沖縄の歴史と文化として学びたいという理由から海外から毎年多くの外国人が訪れている。

「生命の尊重」という理念は、多様な人々の多様なニーズに応えていくという21世紀の空手を支える新しい理念の1つになるであろう。それはまた、人間と自然の調和した発展を目指すエコロジーの考えとも融合する。身体の鍛錬と精神の修養を、「生命の尊重」という理念を基にして行っていくのが、人間性を解放する21世紀の空間である。

5. 第4の理念　「文礼」の発展（文礼発展）—Develop Civility—

「空手は、礼に始まり礼に終わる」といわれる。この表現そのものは、柔道その他の武道でも使われる。繰り返し述べたように、近代社会になって、精神性を強調する必要から「道」の概念が導入された。その具体的な表現が、空手における礼法である。しかしながら問題は、「礼」の意味が十分吟味されず常識的なレベルに留まっていることである。

普通、それは全般的な「礼儀作法」と理解されている。道場に入った時や師や先輩に会ったときに使う一礼、練習や試合の前後の一礼などは、最低限行わなければならないが、まさにその最低限で留まっている場合も多い。最悪の場合は、形だけの礼儀作法を練習中と試合中だけ行い、日常の生活に生かされていないこともある。その理由の1つが、「礼」の意味がこれまで十分吟味されてこなかったことに原因があるように見える。それは、どういう意味であろうか。

「礼」には、いくつかの意味を参考にすると大きく分けて3つの意味がある。①社会の秩序を保つための生活規範の総称であり、儀式、作法、制度、文物を含む。②規範・作法に則っていること。③敬意を持った振る舞いや謝意を表すこと、敬って扱うこと、お
じぎ、の3つである。別の表現で言うと、「礼」の意味を、①感謝や敬意の表現（おじぎはその表われである）、②そのための儀式や作法、③国家社会の秩序の表われとしての文化・制度といった3つのレベルで理解することが出来る。ところが、多くの空手を学ぶ生徒は、「礼」を最初と2番目の意味で理解し、3番目の意味をあまり知らないようである。

さらに「礼」には、哲学的にももっと深い意味がある。「礼に始まり礼に終わる」という場合の日本語の「礼」は、普通英語でcourtesyと訳される。しかしながら、日本語の「礼」の訳としては、一般的にcivility、courtesy（propriety）、manners（etiquette）の3つのカテゴリーが考えられる。それぞれを逆に日本語に翻訳すると、civilityは「禮節作法」に、courtesyやproprietyは「礼儀作法」に、mannersやetiquetteは「行儀作法」にあたるといえる。 「行儀作法」としてのmannersやetiquetteは、時と場所にふさわしい適切な振る舞いの方法という意味であり、「礼儀作法」という意味のcourtesyやproprietyは、ちゃんとした人々が従うべきと考えられている社会のルールに沿った振る舞いの方法である。一方、

「礼節作法」と訳すべきcivilityには、「人間として、市民として、文明社会の一員としてふさわしい振る舞いの方法」という意味がある。形容詞としてのcivilityには、「市民の、公民の、文明社会の、礼儀正しい、（武官に対して）文官の、（軍に対して）民間の、（刑事に対して）民事の」などといった意味がある。こうした意味をすべて含んだものが、「礼節作法」としてのcivilityであり、一言でいうと「市民社会の文明性の表現としての礼儀と節度」である。「衣食足りて礼節を知る」という場合の「礼節」の語の使用が、これに近い。

小島毅によると、「社会」とか「文明」とかという漢語が、societyやcivilizationの翻訳語として機能する前は「礼」という言葉そのものが「文明社会」を表現していた。そして、「礼」があるかないかが文明と野蛮を分けると考えられていたという。

“市民社会の文明性の表現としての礼儀と節度”という意味は、まさにノルベルト・エリアスが『文明化の過程』の中で描いたように、「礼儀作法」の発展のなかで「自己抑制をする」人間が作られてくるという見方と一致する。したがって、自己抑制をできない人間や節度（中庸）を知らない人間は、文明化されていないことになる。つまり、文明化とは人間の自己抑制化が進む過程であり、もし空手を通じてこの自己抑制というものを身につけなければ「礼」を学んだことにはならないのである。東洋英和女学院大学で歴史を教

（24）広辞苑を参考にした。「謝意を表す金品」や「供物」という意味もあるが、ここでいう議論にはあまり関係ないので省略した。
（25）小島毅『東アジアの儒教と礼』山川出版社、2004年、p.2。
（26）ノルベルト・エリアス『文明化の過程』上・下、赤井慧・中村元保・吉田勝訳、法政大学出版局、1997年を参照。
えるP.スィッペルの表現を使えば、ある人がたとえ「礼儀作用」（courtesy）を守ったとしても、自己の感情を抑制できなければ、「文明性」（civility）したがって「礼節作法」を身につけているとはいえないのである。

こうした意味で伝統的な琉球王国の人々は、十分civilすなわち「文明的」であり、かつ「文官的」もしくは「文人的」であった記録は残されている。1816年に琉球王国を訪れたペイジル・ホールは、『朝鮮・琉球航海記』の中で以下のように書いています。（27）少々長いが引用して見てみよう。

このようにして艦を見物に来た（琉球の）人々の数は数え切れない。彼らは艦の上を自由に見ることを許されて大喜びであったが、決してその自由を濫用するようなことはなかった。
その立居振舞いも、もっとも身分の低い者たちでさえ、上品で節度がある。好奇心は旺盛ではあったが、無作法な詫素などはみられなかった。（104頁）

自分の社会においてどのような地位にあるにもせよ、このような後進的な地域に育った（通事）真栄平が、丁重さ、自己抑制、立居振舞の優雅さなど、文明国において、経験上もっとも好ましく有利であると考えられているような種類の社交上の行動様式を身につけているのはない、好奇心をそそられることではない。（212頁）

この島の人々とはつきあってきたがいだ、物産生まれたことも一切なかった。人々は誰かれの差別なく船へやってきて、船室、貯蔵庫、その他どこでも好きなところへ勝手に出入りすることを認められていた。…そして何百という群集が毎日やって来て、何でも好きなものを見たり、いじったりしていた。にもかかわらず、ただ一つの品物といえども紛失したことはなかったのである。（276頁）

琉球の人々はいちじるしく文明化している。人々は無欲で、完全に満足しているようにみえる。正直は、社会がこのように充実していることの当然の結果であるのかもしれない。（277頁）

かつての琉球王国は「守礼の邦」を自称し、その肩を首里城の門に掲げた。それは中国に対して、琉球が儒教の礼則に則った文明国であることをアピールする意図があったといわれているが、ホールの記述を読む限り、十分その名に値するように思える。ホールの航海記には、もう1つ重要な記述がある。

…彼らは一種のレスリングのような遊び（空手か）に興じていた。かつてわれわれが（琉球の）スパーサーリングをしているところを見たことのある奥間は、突然、勝負の防御の姿勢をとるとともに、これまで彼らの誰も見せたことのないような殺気立った顔付きをした。

このとき奥間とむかし合っていた士官は、彼が殴りかかって来るものと思い、反射的に身構えた。しかし真栄平のすばやい手が、この様子を見てとった。彼は二言、三言、奥間に言葉をかけ、たまらぬ平常の落ち着きをとりもどさせてしまったのである。

われわれは奥間に対して魔法のような効果をもたらしたこの言葉がなんであったのか、聞き出そうとしたが、真栄平はとりあえず、次のように言いながら話をそらそうとした。…「琉球人は殴らない。琉球人は書く。一撃の時はいれない。よろしくない。ノー、ノー、インギリス人は

（27）ペイジル・ホール『朝鮮・琉球航海記』春名徹訳、岩波書店、2003年。
とてもいい。イエス、イエス、イエス。琉球人は殴らない「(Loo-choo man no fight; Loo-choo man write… )」
真栄平は、奥間が羽目を外しそうだと考えたかもしれない。あるいはわれわれとの友好を完璧に保つには、たとえ真似事にもせよ鬪争はすわしくない、と考えたのであろう。（223-224頁）

この「Loo-choo man write」は、訳者によれば「文人だ」という意味である（354頁、注224）。この記述は、琉球王国の役人は「文人」であり、その「文人」たちが空手を学んでいたことを示す傍証のように思える。よくいわれるように徳川時代の日本の支配層は「武士」であるが、琉球王国の支配層は「文人」であった。琉球の武術空手はかつて文人によって担われ、日本本土の武術は武士つまり武士によって担われたといえるかもしれない。civilityを「礼節作法」であると同時に「文人」（もしくは「文官」）たちの「文明性」と理解し、それを21世紀に生かすことは重要であるように思える。

21世紀の“解放の空手”は、「文明性」(civility)を身に付けるための文人たち、もしくは市民たちの真の「礼節」を修得する空手でありたい。そしてそれは、1つには伝統文化としての空手の型や鍛錬の様式を繰り返し修練することによって身に付けることができるように思える。ここでは、そのような文明性と文化性を身につけさせる空手の修練の理念を、「文礼」の発展」と表現したい。“文礼”は筆者らの造語である。「礼節の発展」としてもいいのだが、それでは従来のような個人的レベルの狭い意味で受け取られる可能性がある。むしろ、「文明性」と「礼節作法」の両方の意味を含めて「文礼」の発展」としたい。“解放の空手”の標語は、「空手は、礼節（“文礼”）に始まり、礼節（“文礼”）を発展させる」である。この場合の「礼節（“文礼”）を発展させる」という意味は、礼節作法を個人のレベルに留めるのではなく、抗争状況を解決する人々の間の相互作用や社会秩序をより文明的なものにしていくという理想を込んでいる。

IV さいごに 空手の新しい可能性

これまで見たように武道は近代の産物である。中国武術との深い結びつきによって近代

(28) 仲原善応は、「琉球王国の性格と武器」のなかで、日本では、武士道が支配階級の道徳生活の骨格を成しており、刀剣に象徴される武人の政治を行っていたのであり、一方琉球は、儒教道徳の孝が上下を貫く最高の道徳で、支配階級は文人の政治を行っていたと論じている（仲原善応『沖縄と小笠原』4号、南方同志協議会、1958年、pp.38-43）。さらに、武士道のない琉球では、「武士」とは「空手の名人」を意味していた。
に編み出された空手は沖縄をその発祥の地とするが、沖縄の空手をいわゆる武道としての範囲にそのまま当てはめて理解していくには、まだ未整理の部分も多い。この点に関しては、さらなる実証研究が必要であろう。

本稿では、後（ポスト）近代に必要とされる空手を考察するにあたって、筆者らは、「武芸」という伝統的な言葉をとらえ直し、空手を「武芸」として位置づけたうえで、4つの基本理念をもとに“解放の空手”をイメージしてみた。すなわち、第1の理念「空手に害心攻撃なし」、第2の理念「空手に解決あり」、第3の理念「生命の尊重」（生命尊重）、第4の理念「“文礼”の発展」（文礼発展）である。さらに、これらの理念の技術的表現として、「寸止め」の意義を考察した。

総じて、空手は、暴力を前提として戦う技術として編み出され、暴力を制する手段に発展し、さらに人間性を尊重して暴力的状況を解消する手段としての発展の方向性を持つということになる。そのことによって、空手は、より多くの一般市民（男性、女性、子ども、老人、身体障害者など）が、人間的な教養を身につけるために、教養の一つとして空手を学ぶことを目標とすることができるのである。それを通じて、人々が自らの人間性を陶冶し、人間性の解放を目指すような身体技能として。

（参考文献）
※以下の文献は、筆者らによって確認されたものであり、研究上の便宜を図るため、刊行年順に配列した。

徳田安貞『唐手』『琉陽』第18号、沖縄県立中学校学友会、1909年、pp.22-26。
松篤「沖縄の武技－唐手に就いて－安里安恵氏談」『琉球新報』（上・中・下）1914年（1月17日～19日）。
石野瑛『獨特の武技唐手と相撲』『南島の自然と人』三笠堂書店、1916年、pp.169-176。
冨名腰義『琉球拳法唐手』武侠社、1922年、284p。
真境名安興『唐手の起源、沖縄固有の武技、唐手の流派と種類、沖縄の棒法、陳元貞と唐手』『沖繩－千百年史』琉球文教図書、1923年、pp.332-335。
鳴絃樓主人『唐手拳権大試合』『キング』9月号、大日本雄辯会講談社、1924年、pp.196-204。
冨名腰義珍『練膽護身－唐手術』大倉廣文堂、1925年、304p。
本部朝基『沖縄拳法唐手術－組手編』唐手術普及会、1926年、58p。
三木二三郎・高田瑞穂『拳法概説』東京帝國大學唐手研究會、1930年、242p。
本部朝基『私の唐手術』東京帝國大學唐手研究會、1932年、99p。
陸奥瑞穂『唐手拳法－全』東大唐手研究會、1933年、482p。
宮城長順「剛柔流拳法」自筆史料、1932年、8枚。
伊波普猷『琉球に於ける武術の撤廃と拳法の発達』『歴史公論』第二巻第十一号、雄山閣、1933年、pp.37~49。
宮城長順『唐手道概説』講演要項、1934年（3月23日）、24p。
空手研究社（仲宗根原和）『空手研究 第1輯』空手研究社興武館，1934年，135p。

矢田盛信『唐手術の研究』新光閣，1934年，105p。

摩文仁賢和『攻防自在護身術 空手拳法』大南洋社，1934年，160p。

摩文仁賢和『攻防自在 空手拳法 十八の研究』空手研究社興武館，1934年，176p。

摩文仁賢和・仲宗根原和『攻防自在護身拳法 空手道入門－別名・空手獨習－』空手研究社興武館，1935年，210p。

松本信雄『空手道教範』廣文堂書店，1935年，302p。

摩文仁賢和・仲宗根原和『攻防拳法 空手道入門－別名・空手術教範－』京文書社書店，1937年，209p。

仲宗根原和『空手の話』南山社，1937年，57p。

高良昭昌『琉球拳法唐手術の話－呼吸を整ふ可き話－』高良昭昌，1937年，350p。

仲宗根原和『空手道大観』東京図書株式會社，1938年，414p。

仲宗根原和『武道極意物語』万里閣，1938年，528p。

富名腰義珍『空手道神髄』大日本空手道松濤館，1939年，51p。

宮城長順『法剛柔吾句』月刊文化沖縄，月刊文化沖縄社，1942年，pp.3-7。

富名腰義珍『増補 空手道教範』廣文堂書店，1941年，302p。

仲宗根原和『武道物語』万里閣，1943年，528p。

金城裕『新しい空手基本練習法』空手時報社，1954年，97p。

宮城久輝『空手道』日月社，1955年，285p。

遠山寬賢『奥義秘術 空手道』鶴書房，1956年，197p。

船越義珍『空手道－結呈－』講談社，1956年，221p。

宮城敬『空手道の楽しみ方』西東社，1963年，216p。

祝嶺智編『新空手道教範』日本芸術社，1964年，510p。

島袋永三『沖縄空手道並びに王統記』錦道館空手研究会，1964年，58p。

平信賢『琉球古武道大観』乾の巻，木暮武秀，1964年，70p。

大山倍達『100万人の空手』東都書房，1969年，314p。

松村興勝『空手（泊手）中興の祖 松茂良興作略伝』松村興勝，1970年，73p。

渡辺一郎『史料 明治武道史』新人物往来社，1971年，909p。

南郷総正『武道の理論』三一書房，1972年，220p。

井上元勝『琉球古武道』上，織文社，1972年，602p。

玉得博康『先手非道の空手道』紀元社，1973年，258p。

井上元勝『琉球古武道』中，織文社，1974年，648p。

井上元勝『琉球古武道』下，織文社，1974年，475p。

長嶺将真『史実と伝統を守る 沖縄の空手道』新人物往来社，1975年，372p。

上地克英『精説沖縄空手道－その歴史と技法－』上地流空手道協会，1977年，1325p。

田中晶『空手道』創造，1977年，266p。

南郷総正『武道とは何か－武道論要－』三一書房，1977年，244p。

宮里末一『沖縄伝剛柔流空手道』実業の世界社，1978年，254p。

石川文一『琉球の空手物語』琉文社，1979年，256p。

仲本義政『沖縄の伝統武道－その歴史と魂－』文武館，1983年，207p。

沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』上・中・下巻，沖縄タイムス社，1983年。

沖縄県教育庁文化課『学校における空手道の指導』沖縄県教育委員会，1984年，49p。
史料編集東京学術出版

北谷修武館創立三周年記念事業実行委員会『沖縄の空手道－その理論と技法－』上地琉空手道協会
北谷修武館，1984年，370p。

外間哲弘『沖縄空手道の歩み』外間哲弘，1984年，451p。

吉福康郎『最強格闘技の科学』福昌堂，1985年，271p。

藤原栄一・里村真雄『対談　近代空手道の歴史を語る』ベーコン・マガジン社，1986年，411p。

渡口政吉『空手の心』角川書店，1986年，222p。

長嶋将真『実戦と特技による　沖縄の空手・角力名人伝』新人物往来社，1986年，209p。

宮城篤正『空手の歴史』ひろぎ社，1987年，286p。

佐久田繁『空手名人列伝』月刊沖縄道，1987年，181p。

高岡英夫『武道の科学と格闘技の本質』恵雅堂出版，1987年，300p。

仲里常延『少林寺琉空手教授本　求道』少林寺流求道館仲里道場，1988年，207p。

仲本哲博『沖縄伝統武術　初級－その型と応用－』文武館，1989年，230p。

藤原栄一『格闘技の歴史』ベーコン・マガジン社，1990年，766p。

上原清吉『武道－琉球王家秘伝武術－本部御殿手－』BABジャパン出版局，1992年，259p。

沖縄県教育庁文化課『空手道・古武道基本調査報告書』沖縄県教育委員会，1994年，179p。

渡嘉敷唯『沖縄空手　秘伝　武備志新詔－現代語訳都議法の研究－』渡嘉敷唯，1995年，264p。

沖縄県体育協会体育編集委員会『沖縄県体育協会史』沖縄県体育発展委員会，1995年，640p。

沖縄県教育庁文化課『空手道・古武道基本調査報告書・Ⅱ』沖縄県教育委員会，1995年，

沖縄県教育庁保健体育課『学校体育における空手道指導の手引　第1集』1995年，90p。

沖縄県教育庁保健体育課『学校体育における空手道指導の手引　第2集』1996年，110p。

新里勝彦『琉球王国と武芸』『琉球王国の時代』沖縄国際大学公開講座 I，沖縄国際大学公開講座
実行委員会，1996年，pp. 241-295。

高宮城兼・比嘉敏雄・比嘉勝芳『沖縄空手道概説－武道空手の諸相－』沖縄空手道協会北谷道場，
1996年，538p。

金城裕『月刊　空手道（合本復刻）』創刊号～18号，栂樹書林，1997年。

池田守礼『琉球王国家秘伝武術・本部御殿手の科学的研究－合戦演武から上原清吉宗家の身体的機能
と秘技を探る－』壮神社，1998年，79p。

金城昭夫『空手伝真録－伝来史と源流型－』沖縄図書センター，1999年，334p。

八木明徳『男明徳の人生劇場』八木明徳，2000年，214p。

新垣清『沖縄武道空手の極意－今よみがえる沖縄古伝空手の極意－』福昌堂，2000年，164p。

東原盛男『剛柔感空手道史』チャンプ，2001年，179p。

仲村良雄『首里少林流空手道』空手道円武館，2001年，282p。

金城裕『唐手大鑑』出版館ブック・クラブ，2003年，220p。

演川慶『世界の文化遺産　沖縄空手の巨星たち』新星出版，2003年，281p。

伊波康進『長髪先生金言集　恩師の金言』沖縄自分史センター，2004年，84p。

仲里周五郎『沖縄伝統空手道　小林流の型』沖縄空手道小林流小林館協会総本部，2005年，319p。